

乃木大将の夫人

生誕地に銅像を

鹿児島神青

【鹿児島】乃木希典大將の夫人・乃木静子の生誕地である鹿児島市で三月十五日、静子夫人の銅像復元を目指す募金活動が実施され、県神道青年会（光増秀昭会長）の会員四人が参加した。

大正元年九月十三日、

明治天皇の御大喪にあたり乃木大将とともにその御跡を慕ひ神去られた静子夫人。生誕地の同市では大正八年、その遺徳を顕彰して座像（高さ一・二メートル）が創建されたが、先の大戦中に軍事資材と

して徴収されたと伝えられてをり、現在は同市新屋敷町の生誕地に台座のみが残されてゐる。地元有志のあひだでは、かねてより銅像復元の話があったものの、実

現には至らなかったといふ。しかし、平成二十四年九月十三日に同青年会が台座前で斎行した「乃木静子刀自命遺徳顕彰百年祭」が契機となり、県議会議員や市議会議員、地元の町内会会長らを中心に「乃木静子夫人奉賛会」（平瀬葉子会長）を結成。銅像復元に向け、一千万円の資金確保を目



指して活動を開始した。

今回、同市の繁華街・天文館のアーケードで実

施した募金活動も同奉賛会が主催したもので、同青年会会員はじめ二十五人が参加。募金活動と合はせて趣意書の配布もおこなひ、活動の周知を図った。「静子夫人が鹿児島出身とは知らなかった」との声も聞かれ、銅像が建ててゐた当時を知る人は懐かしさうに「ぜひ実現してください」と激

励の言葉を贈つてゐた。なほ同奉賛会では広く協力を呼びかけてをり、郵便振替での募金も受付てゐる。振替口座の記号・番号は「〇一七九〇一―一四二八三八」で、名義は「乃木静子夫人奉賛会」宛て。一口一万円以上とし、五口以上の協力者の氏名は石盤に銘記する予定となつてゐる。

問合せは、船魂神社内の同奉賛会事務局（〒892-0838 鹿児島県鹿児島市新屋敷町五一五、☎〇九九―二六―七四五七、FAX 〇九九―二二―一〇一九五、電子メール shizu ko_housankai@yahoo.co.jp）まづ。またはウェブサイト（http://www.geocities.jp/shizuko_housankai/）を参照。

「戦後七十年談話」の歴史観

神社庁研修所主任講師
兵庫・平野原神社宮司

山本 安彦

安倍晋三内閣総理大臣は、今夏に戦後七十年の談話を発表するために、

歴史観が問はれることになる。

有識者懇談会をスタートさせた。この談話によつて安倍内閣の歴史認識・

歴史認識の基本になる

のは、現代社会の歴史的

背景を正しく理解することから始まる。歴史認識

に必要なことは、（一）多

くの歴史的事実・事象の

持つ意味を正しく理解す

ること、さらに、（二）時

々の大きな流れの中に、

とがある。歴史はその時代の勝者の主観的事実によつて、客観的事実が歪められることが多い。正しい歴史認識・歴史観を持つためには、科学的・実証的な歴史的事実の検証と理解が必要である。

近代史上において、アジアの大部分の国々は欧米諸国の植民地であった。中国は日清戦争以後、西欧列強の分割競争の対象と化し、さらに、軍閥の割拠・内乱・対外政策の混乱等々のために近代

する日本と、バルカン・東アジアでロシアと対立するイギリスは、必然的に利害を同じくする立場から明治三十五年（一九〇二）日英同盟を締結した。やがてこの同盟は、イギリスの中国における、日本の中国・朝鮮半島における利害・權益を確認し、相互援助を約束するものになっていった。さらに同盟の改訂によって適用範囲はインドにまで拡大していった。第二は、第一次世界大

神社會新会長

胸に時代に臨みたい」

正した。戦後の先 奉賛団体の解散で、英霊祭

神職研修で尋ねたところ、護国神社への参拝経験者が少なく驚いた経験があるさうだ。「神職に対する靖國神社・護国神社への崇敬心を養ふことも考へていかなければ。所長」

と語り、